

## 佐藤先生との50年をふりかえって

### 先生との50年

先生との出会いは1960年秋、富坂診療所での受診でした。以来50余年にわたる先生の存在は私の人生にとって大きな意味を持っていることを改めて痛感している昨今です。とくに母親の死に至るまでの在宅医療における先生の温情は忘れることができません。また、ライフケアシステムの事務局での仕事のお手伝いにお誘い下さったことは、私の70代の10年を生きがいと新しい発見に充ちたものにしてくれました。この経験がなければ私の晩年は無為なものであったに違いありません。

先生が在宅ケアの創始者でありまたライフケアシステムの創業者であること、そしてその評価と位置付けは他にゆずり、ここでは私の先生のお人柄に対する感想を述べることにしたいと思います。

### 優れたお人柄

第一に医療者としての患者に対する限りない優しさを挙げたいと思います。

たとえば寝たきり状態の母が微熱を發したとき、先生は九州での学会にご出張中でしたが、その帰途羽田から八王子の私の自宅まで訪問し診察して下さいました。お陰で大事に至りませんでした。このように患者に対する優しさは無限のものでした。

第二に先生は理想の追求者でありました。

この点は異論のないところだと思いますが、“在宅ケア”という理想を終生追求されました。自伝的作品である『在宅ケアの真髓を求めて』の表題の示すように、終生この理想を追いつづけることあたかも求道者の姿ながらでありました。

第三に気配りの人でした。

組織の上に立つ者としての気配りに優れておられました。

一例を挙げます。ある年のライフケアシステム主催の講演会のときのことで、企画者の一人であった私が会が終わって帰宅したおり、それを見計らったように電話がかかり、会の成功を喜ぶ声と慰労の言葉が伝えられてきました。このように“気配りの人”と言うにふさわしい資質を持っておられ、それがライフケアシステムを30余年にわたり支えてきた力になっていたと言えるでしょう。

### 終わりに

以上述べたことは先生のお人柄の一面でしかありません。しかし先生のお人柄でライフケアシステムを成り立たせていたと言えますし、また辻代表理事が言われるように（ライフケアだより2016年12月号）、私たちにはライフケアシステムという最も大切なものを作って下さいました。

微力ではありますが、会員の一人としてライフケアシステムを支えてゆく努力をすることが先生への御礼と考えております。

今はただ先生のお人柄を偲びながらご冥福をお祈りするのみであります。

(2001年度代表幹事～2009年度代表理事 小林 昭一)